

事はて、公卿以下次第に御馬を給はる馬のさしづなをとりて、御前にす、みて一拜す、取のこしの御馬をば、引分の使として、次將をもて、院、東宮など然るべき所々へまいる、十七日には、又甲斐の國の穂坂御馬をひかる、二十日には武藏國小野の御馬四十疋ひかる、其外秩父御馬二十疋、立野の御馬十五疋、毎年たてまつる、二十三日には信濃望月の御馬二十疋、二十八日には上野御馬五十疋ひかる、さしたる事なし、

〔藝備國郡志上安藝〕牧場略○中 倭俗謂牧養之地直曰牧、上古京師八月十六日有駒牽之儀式、甲斐穗坂、武藏小野、同立野、信濃望月、皆是諸國牧養御馬之地、而仲秋牽之以獻朝廷矣、今悉失其法、告朔之禮已絕、餼羊亦知其名者鮮矣、嗚呼哀哉、牧倭訓 麻岐

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十二月十九日丙寅、是日制、信濃國勅使牧野馬、元八月廿九日貢之、今定十五日、冷然院諸牧、元八月廿五日貢之、今定十一日、

駒牽例

○按ズルニ、是レ勅旨牧ノ史冊ニ見エタル始ナリ、

〔政事要略二十三年中行事〕廿三日○八月信乃國望月御馬事延喜五年五月九日、官符左牧字廿元廿、

吏部記、延長八年九月一日、引信乃勅旨御馬○下略

〔本朝世紀〕天慶二年九月七日乙亥、今日、武藏國由比、小川、石河、立野等御牧御馬四十四匹牽進、仍天皇

○朱 雀 御南殿、四年八月廿五日壬子、此日武藏國石川、立野御牧駒牽也、而不牽進、九月十二日己

亥、此日信濃國勅旨諸牧御馬可牽進之由、以先日被定已了、而逗留近江國之間、御馬廿疋裝束爲洪

水流失、因之今日不堪牽進之由、言上於執當○中 十三日庚午、此日去月十五日可牽進、信濃國勅

旨諸牧御馬六十疋牽進、十一月十日丙寅、此日牽進武藏國石河、由比、小川三箇御牧御馬廿疋、立

野御牧十疋也、是以去八月十三日可牽進、而申延期、今日牽進也、○中 先牽廻石河由比小川御馬○中

略 其後又立野御牧御馬令牽廻乘廻、